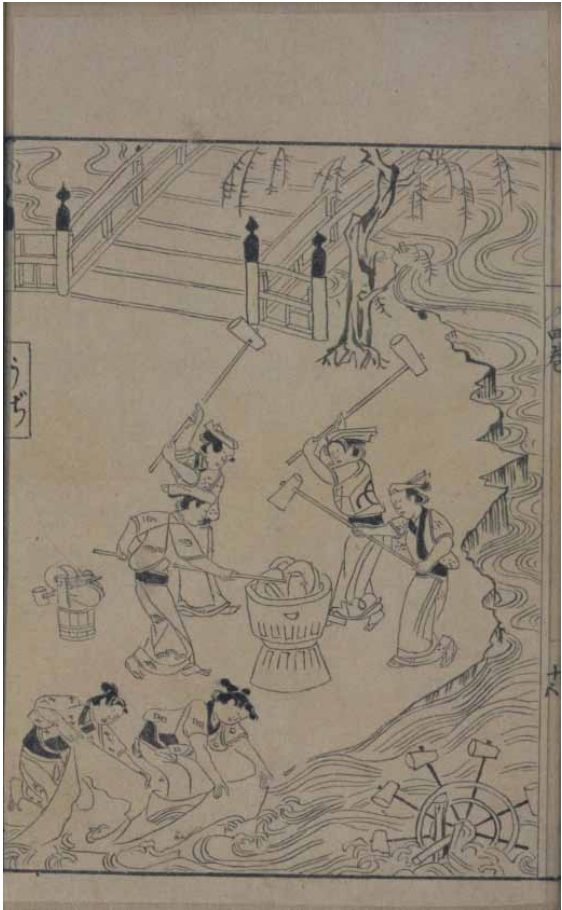


一あし海がたのち
 戻ありあしゆりたのち
 ハナハチ人ののち
 一やまのたのち
 ちりちりやまふきのたのち
 花よさやうられは
 一宇治川のかさねのたのち
 ののち
 さいさいありて
 ののち
 美のち
 花と葉やこが
 まさのち
 花のりくに

京都府立総合資料館蔵



京都府立総合資料館蔵

【原文】

宇治

みやこのたつみ。名所ありと人はいへともまだしらす
伏見の夢もさめぬれ夜をこめつゝも立ち出る人まれ
なれば。こはたをすぎ五ヶの庄のあみたをおがみ奉
る。是は次郎といふものゝあみにあがらせたまへる
ゆへ。世の人みだ次郎といふ也。やかて宇治はしにいた
りぬる。それ此川は西国一の大河なりいにしへのも
のゝふ共先陣後ちんの事はみな人耳にみてれば
今更かたりいでんもめつらしからず。そもゝ
むかしより茶は人のまじはりをなし。ねふりをさまし
むねをきよくし。其徳おほきもの也茗といひ茶と（十二ウ）
いふは。同物にてつむ時の。はやきをそきにてかはる
名なり。もろゝの薬種にもとる時節にしたがひ
て同ものに名のことなるあり。こゝに又いにしへ
より七種の名菌といへるは
森いわ井うもし川下奥の山
ふもとの朝日琵琶をひく也
茶をのみしまひてのあとに。茶碗をはなによせて
意気がよしとほむるはあやまり也。意気といふは

のまぬさきの香也のみしまひてあとの茶碗にのこ

りたるは菌香といふなりと世に名たかき此道者

の物がたり聞うけ侍る。され共茶のむ人をためすに。今（十三才）

時大かた茶碗にのこれるあとの香を意気といひ

ぬれば。われひとり此事しりがほに菌香とほめんよ

り。人なみにして居て。心のうちにはあやまりと。まこ

とをわすれすして。もし人にとはるゝ時はこたへたき

事なり。よろづの道に此の心得はあるへきなり

一はし姫といふは此はしつめの社也。北にあたらせ給ふ

離宮は住吉の明神なり。よなゝ此はし姫にかよは

せたまへるとなり

古今集

さむしろに衣かたしきこよひもや

われをまつらん宇治のはし姫

平等院は宇治のくはんばく殿の御こんりう。ゑしんの（十三ウ）

僧都せつほうありし御寺なり。金葉集雑の上に

忠史法師うちの平等院の寺主になりて宇治に

住付て。ひえの山のかたをながめやりて

宇治川のそのみくつとなりながら

猶雲かゝる山そこひしき

一扇の芝はよりまきさきここの所なり

むもれ木の花さくこともなかりしに

身のなるはてそあはれなりける

一朝日山の哥

ふもとをば宇治の川霧たちこめて

雲ぬにみゆる朝日山かな

権大納言公実(十四才)

一こじまがさきの哥

續古今

咲にほふこしまかさきの山ふきや

八十うち人のかさしなるらむ

藤原光俊

一やまふきの瀬の哥

ちりはつるやまふきの瀬に行春の

花にさほさすうちの河長

西園寺入道

一宇治川のほたるは治承のたゝかひにうたれし

ものゝ亡魂ともいへり。こうしやう寺はちかきころ

さいかうありて。みちすがらのけしきおもしろく

のほり／＼て眺望えならぬ山なり。いにし比辛

夷のはなを生て茶の發句せよといはれて(十四ウ)

花と茶やこぶしになるゝ鷹の爪

まきのしまにて

花のもとに酔てやくだをまきの嶋(十五才)

【校訂本文】

宇治

都の辰巳、名所ありと人はいへども(注1) まだ知らず。伏見の夢も
さめぬれ。夜をこめつつも、立ち出づる人まれなれば、木幡(注2) を
過ぎ、五ヶの庄(注3) の阿弥陀(注4) を拝み奉る。是は次郎といふ
者の網にあがらせ給へるゆへ、世の人、弥陀次郎といふなり。

やがて宇治橋(注5) に至りぬる。それこの川は西国一の大河なり。
いにしへの武士ども、先陣後陣の事(注6) は皆人耳に満てれば、今更
語りいでんも珍しからず。

そもそも昔より、茶は、人のまじはりをなし、眠りをさまし、胸をき
よくし、その徳多きものなり。茗といひ茶といふは同物にて、摘む時の
早き遅きにてかはる名なり。もろもろの薬種にも、採る時節にしたがひ
て同じ物に名の異なるあり。

ここにまたいにしへより七種の名園といへるは、

森いはあうもじ川下奥の山

ふもとの朝日琵琶をひくなり(注7)

茶を飲みしまひての後に、茶碗を鼻によせて、意気がよしと褒むるは
誤りなり。意気といふは飲まぬ先の香なり。飲みしまひて後の茶碗に
残りたるは、菌香といふなりと、世に名高き此道者(注8) の物がたり
聞きうけ侍る。されども、茶飲む人を試すに、今時大かた茶碗に残れる
後の香を意気といひぬれば、我ひとりこの事知り顔に、菌香と褒めんよ
り、人並にして居て、心の内には誤りと、まことを忘れずして、もし人
に問はるる時はこたへたき事なり。万の道にこの心得はあるべきなり。
一橋姫と言ふは此橋詰めの社也(注9)。北にあたらせ給ふ離宮(注10)

は住吉の明神なり。夜な夜な此橋姫に通はせ給へるとなり。
古今集

さむしろに衣片敷きこよひもや

われを待つらん宇治の橋姫(注11)

平等院は宇治の関白殿(注12)の御建立、恵心の僧都(注13)説法
ありし御寺なり。金葉集雑の上に忠史法師(注14)、宇治の平等院の寺
主(注15)になりて宇治に住み付きて、比叡の山のかたをながめやりて

宇治川のその水屑となりながら

猶雲かかる山ぞ恋しき(注16)

一扇の芝(注17)は頼政(注18)最期の所なり。

埋もれ木の花さくこともなかりしに

身のなるはてぞあはれなりける(注19)

一朝日山の歌

ふもとをば宇治の川霧たちこめて

雲居にみゆる朝日山かな(注20)

権大納言公實(注21)

一こじまがさぎの歌

續古今

咲き匂ふこじまがさぎの山吹や

八十つぢ人のかざしなるらん(注22)

藤原光俊(注23)

一やまぶきの瀬の歌

散り果つる山吹の瀬に行く春の

花に棹さす宇治の河長(注24)

西園寺入道(注25)

一宇治川の蛩は治承の戦ひ(注26)に討たれし者の亡魂とも言へり。
興聖寺(注27)は近き頃再興ありて、道すがらの景色おもしろく登り
登りて眺望えならぬ山(注28)なり。去にし比辛夷のはなを活けて茶の
発句せよと言はれて

花と茶やこぶしになる鷹の爪(注29)

槇のしまにて

花のもとに酔てやくたをまきの嶋

【注】

(1) 喜撰法師の「わが庵は都のたつみしかぞすむよをうち山と人はいふなり」（『百人一首』）を踏まえての行文。古注釈の中には、

この歌の上句と下句のつながりが素直でないことを、「世を宇治山と人はいへどもと有るべき歌」（『宗祇抄』）とするものがある。「たつみ」は東南で、都から見ての宇治の方角をさす。

(2) 現在の宇治市木幡。大和と山城を結ぶ交通の要衝であった。

(3) 現在の宇治市五ヶ庄。近衛家の領地「五箇庄」に由来する。黄檗山万福寺がある。

(4) 西方寺。俗に「弥陀次郎」と称する。浄土宗智恩院派。

(5) 日本でも最古の橋の一つ。「宇治橋断碑」によれば僧道登の架けた橋といい、『続日本紀』には道昭説がある。

(6) 『平家物語』巻九に記される逸話。寿永二（一一八三）年一月二十日、源義仲の軍勢を攻める源義経軍の武士佐々木四郎高綱と梶原源太景季が、水かさの増した宇治川で先陣争いをしたさい、とつさの機転で高綱が一番乗りをはたす。

(7) 室町時代、將軍足利義満、管領斯波氏、守護大名佐々木・山名氏によって開拓された大規模な茶園を、和歌の形に詠み込んだもの。

『分類草木』（真松齋春溪作 永祿七（一五六四）年成）に、

「相国御園 森・川下、武衛園 朝日、京極園 祝・奥の山、山

名園 宇文字。其の後、上林、之に加へて七種の園と号く」とあり、小異がある。後の出版物であるが、寛文十二（一六七二）年刊『狂歌咄』に同じ形で見える。

(8) 松永貞徳の『徒然草なぐさみ草』（慶安五（一六五二）年跋）百二段に、辻玄斎の弟子保久の言葉として載せられる。

(9) 現在の橋姫神社は宇治川西岸にあり、瀬織津姫と住吉明神を合祀する。

(10) かつては宇治川東岸の宇治神社と宇治上神社を併せて離宮八幡と称した。

(11) 『古今和歌集』巻一四、恋四、六八九番歌。詠み人知らず。

(12) 藤原頼通（九九二〜一〇七四）が父道長の別荘を寺とし、永承七年（一〇五二）に落慶供養した。

(13) 源信（九四二〜一〇一七）。『往生要集』を撰述し浄土信仰に大きな影響を与えた。

(14) 忠快の誤りか。生没年未詳。平棟仲の子で周防内侍の兄、比叡山法師。

(15) 寺院中の僧侶を統率し、寺務、特に堂塔の造営管理を司る役職。

(16) 『金葉和歌集』巻九、雑上、六九〇番歌。作者は忠快法師、詞書は本文と同じ。

(17) 平等院観音堂の北側にある芝地。宇治の名所の一つ。

(18) 源頼政(一一〇五〜八〇)。平安末期の武将、弓の名人で歌人としても名高く、源三位と称せらる。治承四年(一一八〇)、高倉院の皇子以仁王を奉じて平家に挙兵したが、五月二六日この場所で扇を敷いて自刃した。

(19) 『平家物語』巻第四、「宮御最期」。

(20) 朝日山は平等院対岸、東側にある山。『新古今和歌集』巻五、秋下、四九四番歌。詞書「堀河院御時、百首歌奉りけるに、霧をよめる」。

(21) 藤原公実(一一〇五〜一一〇七)。

(22) こじまが崎は『源氏物語』に由来する中世の歌枕。宇治橋下流にあった中州の一つ。『続古今和歌集』巻一、春下、百六三番歌。詞書「文永二年七月七日、題を探りて七百首の歌人々によませ侍りしに、島山吹を」。

(23) 藤原光俊(一一二〇〜一一七六)。鎌倉中期の歌人。

(24) やまぶきの瀬は中世の歌枕で宇治川周辺と思われるが所在不明。『新拾遺和歌集』巻二、夏、一八二番歌。詞書「二品法親王道助家五十首歌に「河山吹」。

(25) 西園寺実兼(一一四九〜一二三二)。鎌倉後期の公卿。

(26) 治承四年五月、以仁王の乱の橋合戦で平家に敗死した源氏の軍勢。

(27) 興聖寺は曹洞宗永平寺派、道元によって最初は深草に建立された

が、後に廃絶した。慶安元年(一六四三)に淀城主永井尚政によつてこの地に再興された。

(28) 仏徳山。朝日山の支峰。

(29) 鷹の爪は上質な茶の異名。握り拳にとまる鷹狩りの鷹と掛詞になつてゐる。また花の辛夷と拳も同じく掛詞。

【現代語訳】

宇治

ここは都の東南にあたり、名所が多い所と人は言いますが、私はよく知りません。伏見の港から夜深に船で出発しますが、乗り合わせた人は多くありません。木幡を通り、五ヶ庄の阿弥陀様に詣りました。この阿弥陀は、次郎という者が引く綱にかかった仏なので、世間では、弥陀次郎と呼んでいます。

そうこうしているうちに、宇治橋に着きました。なんといつてもこの川は西国一の大河です。昔の士たちの先陣争いの話は皆知っていることなので、いまさらここで語るのも陳腐です。

そもそも茶というものは、人の交わりをすすめ、眠気をさまし、胸をさわやかにしたりと、その徳は多いものです。茗と茶は同じもので、摘む時期が早いか遅いかで名がかわります。様々な薬種においても、採る時期によって、同じものがいろいろに名前をかえることがあります。

昔から七名園といわれているのは、

森（森） いはい（祝） うもじ（宇文字） 川下（川下） 奥の山（奥の

山） ふもとの朝日（朝日） 琵琶（琵琶） をひくなり

と歌に詠まれているところです。

茶を飲み終わったあと、茶碗を鼻に引き寄せて、「意気がよい」と褒めるのは誤りです。「意気」というのは飲む前の香りをいいます。飲み終わった後の香りは「園香」というのです、と、世に名高い教奇者が語るのを聞いたことがあります。しかし、茶を飲む人にこのことを試して

みましたところ、現代では、たいてい飲み終わった後の茶に残る香りを

「意気」と言っていますので、自分だけがいかにも訳知り顔に「園香」

というよりは、他の人と同じように「意気」と言っても、心の中ではそれは誤りであると、本当のことを忘れないでいて、このことを人に聞かれた時は、正しいことを答えないものです。万事、このような心の持ちようが肝心です。

一橋姫というのは此の宇治橋の橋詰にある社です。この北の方角に当たられる離宮明神は住吉明神です。毎晩この橋姫の神に住吉明神がお通いになるということです。

『土占集』

狭い席に独り寝の袖を敷いて、今夜も寂しく私を待っているのだろ

うか、宇治の橋姫は

平等院は宇治の関白殿のご建立になります。恵心僧都（源信）が説法した御寺です。『金葉和歌集』雑の上にある和歌で、忠史（快）法師が宇治の平等院の寺主になって宇治に住みついてから、比叡山の方を眺めて

宇治の川底に沈む塵芥のように、身はここに留まる私であるが、やはり雲のかかっているあの比叡山が恋しいことだ。

一扇の芝という所は頼政が自害した場所です。

老いた我が身は埋もれ木のように、日の当たる場所で花咲くこともなかったのに、こんな身の成れの果てが悲しい

一朝日山を詠んだ和歌

山の麓には宇治川の川霧がたちこめているけれど、峯は雲の上に聳えて見える朝日山であることよ
権大納言公実

一小島が崎を詠んだ和歌

『続古今集』

美しく咲き匂う小島が崎の山吹の花、これはたかさんの宇治の人々が冠に挿す花飾りなのだろう
藤原光俊

一山吹の瀬を詠んだ和歌

山吹の瀬に晩春の散り果てた山吹の花が浮かぶ、その川面に棹をさす宇治川の渡し守よ
西園寺入道

一宇治川に飛ぶ蜩は、治承の合戦で敗死した人々の靈魂だとも云われています。興聖寺は近頃再興されましたが、そこに行く道中の風景は興趣があつて、どんどん登るにつれ言いようもなくすばらしい眺望が開ける山です。先年、辛夷の花をいけての茶会の発句を詠めと言われたので

この座の花と茶は、拳に馴れて留まる鷹みたいにまさにびつたり組み合わせであるよ（なぜなら花はこぶしで、鷹の爪は茶の異名だから）

槇の島での発句

満開の桜の下で酔っぱらったせいかわだをまいてしまった、ここがその槇の島。

（母利司朗・安達敬子）